

研究結果概要書

—映画館をはじめとする芸術文化に係る意識と需要の調査—

島根県立大学総合政策学部 4 年

高橋智佳

本研究では映画館の無い街に住む皆さんの「映画館に対する意識の調査」を行い、その本音の部分である需要を明らかにし、浜田市での芸術文化振興に寄与することを目的として行ったものである。浜田に住む方々へのアンケート調査を実施し、「浜田市と映画館」に関する回答を得た。市民の方々の「街に映画館が欲しい」という気持ち、需要は高いものであった。また、市民運営のかたちをとってシアターを企画・運営する際には参加を試みるか否かの問を設け、「学業や仕事以外」の“地域の”取り組みに対してどのような意識を有しているのかについて分析した。「映画館があればよい」と考える割合が高いのに対して、「自らが携わるか否か」においては「いいえ」と回答する割合が高いところに、実現の際の難しさがある点について論じている。

各地のコミュニティシネマへの訪問、「Shimane Cinema Onozawa」支配人へのインタビューを通じて、浜田市と映画の関り方について考察した。以上を踏まえて、浜田市では鑑賞+映画への「関心」そのものを呼び起こす形での上映会、語り考える場所が必要であると考え企画を行った。鑑賞の後に、インタビューやワークショップ形式での対話の場を設け、「自らの関心」がどのように変容したのかについて言葉や絵にしてもらった。映画に対しての関心や、他者と映画を共に観ることへの好感が参加者の中で高まること、世代を超えた語り合いの場の重要性について明らかにすることができた。また、企画や上映会の中での対話を通じて「高校生×大学生」、「大学生×地域の方々」の関係をつないでいくには、大学生の役割が大きいことが確認できた。コロナ感染症によって数回開催予定であったワークショップが1度の実現となってしまった。当初の目標としていた「必ずしも必要な映画館ではないが、“豊かな”生き方をみなで目指すための投資や期待溢れるまち」としての魅力発信が可能になるには、参加することにより映画鑑賞と「自分の関心」を呼び起こし感情に触れる「語り合いの場所」を同時に継続して行っていくことが必要であると考察する。『映画館のある暮らし』を文化として受け入れていくためにも、今回のように実現可能な形と、鑑賞だけにとどまらない市民の皆さんの関係づくりに重きを置いた取り組みを続けることが重要であり、関心のある他の大学生へのバトンタッチを行い、実施が途絶えないようにしたい。

浜田市内、また隣接の益田市内で活動されている方を中心に調査にご協力いただき、アドバイスを頂いた。映画に関して特に上映に対しての知識が不足したままに調査を始めたことから、「上映会の実施」に至るまでに多くの失敗を経験した。また、多くの方や団体の皆さんと連絡を取りながら進めていくうえで想定していたところと異なる方々と研究を進める必要があったことで最後まで模索の続く研究であった。